

チェスター伯ヒューとその封臣たち

——ロバート・オヴ・リズランを中心に——

中 村 敦 子

キーワード：アングロ・ノルマン貴族、ノルマン征服

はじめに

ノルマン征服後、チェスター伯となったヒューは、ノルマンディの有力貴族家系ゴツ家の出身である。征服後、最初にチェシャーを支配したジェルボッドが故郷フランドルへ帰り、その後を継いだのがヒューであった。彼はチェスター伯としてイングランドに広大な所領を保有するようになっただけでなく、故郷ノルマンディの所領も併せ持ち、アングロ・ノルマン期の有力貴族として活躍する¹⁾。

12世紀ノルマンディ中部サンテヴルール修道院のオルデリク・ヴィタリスによる歴史叙述『教会史』にヒューは生き生きと描写され²⁾、またウィリアム征服王の証書にもしばしば登場しており、この時期の貴族社会における彼の存在感が感じられる。だが、軍事遠征や宮廷への出仕のように、アングロ・ノルマン社会における有力貴族として活動する際、ヒューは彼に従う人々によって常に支えられていたはずである³⁾。ヒューとその封臣たちは、それぞれ一体どのような背景のもとに、どのようなつながりを作り上げていたのだろうか⁴⁾。

本稿では、このヒューとその封臣たちのつながりの背景に注目したい。相対的に豊富なヒュー自身の情報に対し、その封臣たちレベルになると、彼らについて教えてくれる史料は非常に少なくなる。ただ、11世紀末イングランドの場合、ドゥームズデー・ブックのおかげで所領保有関係については比較的詳細に知ることができる。この点は、大陸側にはないメリットであり、そのため、イングランド側の研究に独特の情報量をもたらしていると言えよう。本稿は、このような史料上研究上の偏りを念頭におきつつ、ヒューとその主要な封臣たちとの関係に焦点を当て、彼らのネットワークのありかたをさぐることを目的とする。

さて、1066年のノルマン征服によってイングランドは、大きな、そして多岐にわたる変化を経験した。その一つとして、アングロ・サクソン期イングランドの有力貴族た

ちの多くが大陸出身者に入れ替わったことが挙げられる⁵⁾。イングランド貴族たちは1066年10月14日のヘイスティングズの戦いで戦死するか、その後長く続く混乱の中で所領や命を失って、現実から、あるいは史料上から消え去っていった。彼らの所領の多くは、ウィリアム征服王に従って新たにやってきた大陸出身の貴族たちに配分される。だがそれは一度になされたのではなく、征服の進展にともなってさまざまな状況のもと、段階的に行われた⁶⁾。たとえば、チェスター伯ヒューの所領には、ジェルボッドの後を継いで支配した部分に加え、後からヒューが手に入れた部分の両方が含まれる⁷⁾。

こうして、ノルマン征服はイングランドの所領保有状況を大きく変化させた。かつてはこの変化は、大陸からイングランドへの封建制の導入という観点において、土地保有状況の変化をどうとらえるかという点と合わせ、活発に議論されてきた。ノルマン征服にともなう所領保有の変化については、当然ながらドゥームズデー・ブックから得られる情報をもとに研究がなされる。この所領保有のありかた、そしてその変化のありかたといった問題は、イングランドにおける封建制研究の中心的課題であり、所領保有の実態をどう評価するかという視角を中心に長い間注目を浴びてきたのだった。現在では、「封建制の導入」という観点は、封建制そのものの理解の変化を踏まえ、制度面を越えて様々な方向へと拡散している。だが、所領保有を媒介とした人的結合の実態とはどのようなものだったのか、ノルマン征服の前後でどのように変化したのか、それがどのような社会の変化をもたらしたのか、という観点は重要な問題であり続けていよう⁸⁾。

そして、ノルマン征服前後の社会の変化を考える際に重要なのは、土地保有形態といった制度面だけではない。新たにイングランドに所領を保有することになった貴族たちの背景もさまざまである。ノルマン征服以前からウィリアム征服王に近く、ノルマンディにすでに広大な所領を保持している人々が、さらにイングランドに大土地を得た例、大陸での土地保有が確認できず、おそらくそれほど大きな領地はもっていなかったと思われる人々が、新たにイングランドに広大な所領を得る例など、ウィリアム征服王のもとに集った貴族たちは多様であり、彼らの新たな所領保有においても、多様な保有パターンが生み出される⁹⁾。そして、彼らの出身地とのつながりも、彼らの行動を左右しただろう。だが、大陸における彼らの所領保有についての情報は少なく、あったとしてもドゥームズデー・ブックのように統合されることも残ることもなく、大半が失われてしまったと思われる。だが、ジェルボッドがフランドルに戻ったことが示すように、史料としては残っていないともイングランドに渡ってきた人々と故郷とのつながりはすぐにはとぎれなかった。それらは所領の保有に限らず、姻戚関係の構築や修道院への寄進といった様々な形で維持されたと考えられるのである。

さて、本稿でとりあげるチェスター伯ヒューは、ノルマンディからイングランドに渡り、チェスター伯の地位と広大な所領を得て、有力アングロ・ノルマン貴族の1人となった。ドゥームズデー・ブックからは、ドゥームズデー調査が行われた1086年当時

のヒューの所領が、チェシャーのみならずイングランド各地に存在し、イングランドにおける所領の多さとしてはトップ・クラスの貴族であったことがわかる。ヒューが1086年のドゥームズデー調査の際に保有していた所領の価値は916ポンドであり、最大にして抜きんでて広大な所領をもっていた王であるウィリアムをのぞいても、10番目に多くの所領を保有していた。ドゥームズデー・ブックに残る直属封臣の膨大な人数を考えると、ヒューがいかに広大な土地を保有していたかがうかがわれる¹⁰⁾。

伯の名を冠するチェスターは、大ブリテン島の西部、ウェールズに接するチェシャーの中心都市である。チェスターは対ウェールズ政策の軍事的拠点として古くから重要性をもっていた¹¹⁾。有力直属封臣であるヒューは、チェシャーのほとんどの所領を王から直接保有した¹²⁾。すなわち、ヒューがチェシャーにおいては圧倒的な力をもつことになる。この点から、チェシャーが後世パラティネット（伯領州）として特別視されたことを前提とし、その状況をヒューの時代に遡って考えられる傾向があったが、このように伯がその支配の中心となる州で全面的に支配権を持つ例は、チェシャーではなかった。そして、12世紀末頃まではチェスター伯の地位は特別なものではなかったのである¹³⁾。

チェスター伯家の証書集を刊行し、ノルマン征服後のチェシャーとチェスター伯についての基礎的な研究を行ったG・バラクラフは、チェスター伯であっても、チェスター伯がイングランド全体に広がる広大な所領を保有していた点に着目すべきである、と指摘している¹⁴⁾。一方、ノルマンディにおいてはヒューの家系はアヴランシュ（アヴランサン）副伯家系である。ヒューがノルマン征服に参加した時点では、彼の父リシャール・ゴツがまだ大陸ノルマンディのゴツ家の所領を保有していたと考えられるが、その後ヒューはおそらくノルマンディの所領をも保有し、大陸ノルマンディにおける活躍も知られるようになる。ドゥームズデー・ブックのないノルマンディにおける貴族たちの所領保有の詳細は不明だが、断片的ながら、ゴツ家、そしてヒューが中部から西部のノルマンディにかけて所領を保有していたであろうことがうかがわれる¹⁵⁾。

1. ドゥームズデー・ブックにおけるチェスター伯ヒューとその封臣たち

では、具体的にチェスター伯ヒューとその封臣たちをたどっていくことにしよう。これには重要な先行研究がある。ドゥームズデー・ブックを対象に、ヒューの所領と家臣たちについて詳細に分析したC・P・ルイスの研究である¹⁶⁾。ルイスの研究は、ノルマン征服期のチェシャーを対象とした研究や、チェスター伯に関連する研究において常に土台となってきた。だが、研究が公表されてからすでに30年以上たち、研究状況は変化した。とくに、ドゥームズデー・ブックの利用がオンライン化し、情報がデータベースとなって格段に得やすくなったことで、研究はさらに活発化している¹⁷⁾。

そこで、本稿では以下のように進める。まず、ドゥームズデー・ブックにみられる

チェスター伯ヒューの封臣たちについて、ルイスの研究を補足しながら確認する。そしてヒューと関わったであろう封臣たち、そして彼らを取りまく人的関係に注目する。ここでは、前述のようにオルデリクによる情報の多いロバート・オヴ・リズランを中心に、ヒューの有力封臣を取りあげたい。彼らはどのような背景のもとにヒューのもとに集まったのか、また、さらに彼らそれぞれが持つネットワークとはどのようなものだったのだろうか。

さて、ヒューの所領は複数の領主たちに由来する一方、チェシャーのみは、マーシアのエドウィン伯の支配していた所領を包括的に継承したと考えられている。チェシャー内については、チェスター司教も所領を保有していたが、それは大きなものではなかった¹⁸⁾。このように所領保有がある有力貴族に集中している状況は、同じくウェールズ境界地域でチェシャーに隣接するシュルーズベリ伯のシュロップシャーも同様である¹⁹⁾。そして、ヒューが継承したチェシャー外の所領の多くは、エドワード証聖王の後イングランド王位を継承し、ヘイスティングズで戦死したハロルドの所領であった²⁰⁾。

ルイスによれば、ヒューの封臣はドゥームズデー・ブックの所領保有のありかたをもとに、大きく2つのグループにわけることができる²¹⁾。ひとつは、ヒュー自身の封臣たちである。彼らは4～5人の中心的人物から、1～2のマナーを細々と保有するノルマン征服を生き残ったイングランド人たちにいたるまで、所領の大きさはさまざまであるが、その所領のほとんどをヒューからのみ下封されているという点で共通している。もうひとつは、王から直接所領を保有している直属封臣である一方、ヒューからも所領を保有している少数の封臣たちである。そして彼らがヒューから保有するのは、チェシャー外の所領である²²⁾。

こうして、ヒューに所領を依存する封臣たちとそれ以外の直属封臣とわけることができるが、ヒューに所領を依存する封臣たちの中で、まず中心人物たち、すなわちヒューからとりわけ多くの所領を保有しているものたちが4人あげられる。その筆頭はロバート・オヴ・リズランであり、134.25ポンドに価する所領を保有している。彼はウィリアム征服王からも直接52ポンドを保有していることに注意しておこう。この点で、ロバート・オヴ・リズランは征服王の直属封臣でもあった²³⁾。続くウィリアム・マルバンクは、93.58ポンドを保有している²⁴⁾。次にはウィリアム・フィッツナイジェル・オヴ・ホルトンが続き、彼は83.19ポンドを保有している²⁵⁾。4人目のロバート・フィッツヒュー・オヴ・マルパスもまた直属封臣ではなく、72.92ポンドを保有している²⁶⁾。

このように、ルイスはヒューからどのように所領を保有しているかどうか、チェシャーとそれ以外の所領をどのように保有しているか、という点に着目して分類した。所領保有をチェシャーとそれ以外の州とを分けて考えるには理由がある。つまり、前述のように、チェシャーは全体がチェスター伯の支配下にあり、王の令状がチェシャー内部で行使されないなど、チェシャーにおいてチェスター伯が王権にかわるような特権的

立場を持っていたとされてきた。チェスター伯の家臣たちが、主君であるチェスター伯が特権的に支配するチェシャーに所領を保有しているかどうかは、チェスター伯との関係において重要な意味を持っていただろう。

さらに、彼らの出自を考慮する必要がある。ドゥームズデー・ブックのもととなったドゥームズデー調査の時点である1086年は、ノルマン征服から20年たち、ノルマンディを中心とする大陸出身の貴族たちが征服世代から少しずつ次の世代に交替していく時期と言えよう。征服王の次にイングランド王位を継ぐウィリアム2世はノルマン征服を経験しているが、その弟で次のイングランド王であるヘンリ1世は、征服後に生まれている。ヒューがヘンリ1世が即位した1100年まで生きていたことを考えると、ヒューはノルマン征服の際にはまだ若かったであろう。実際、ヒューが征服前のノルマンディ公の証書等に登場したことを示す史料はなく、それ以外からもノルマン征服以前の活躍が見られない。ならば、おそらく若くしてチェスター伯となったヒューに従っていた封臣たちも同様に、ノルマンディで所領を得る機会はないと判断し、イングランドに活路をもとめた若者たちが多かったのではないか、という予測もたつ。そして、彼らと出身地の大陸所領との関係はどのように続いていたのか、あるいは変化したのだろうか。

本稿では、ヒューからイングランド所領の拠点チェシャーを中心に所領を下封されている、前述した4人の有力封臣たちの中でも、ヒューの親族でもあり、北ウェールズとの関係でも活躍したロバート・オヴ・リズランを中心にする。彼については、オルデリク・ヴィタリスが特に具体的な情報を教えてくれるからである。その後それ以外の3人の有力封臣について考察を加えていく。

2. ロバート・オヴ・リズラン

ドゥームズデー・ブックからは、チェスター伯ヒューから所領を保有している人々の数は約70名にのぼることがわかる。その中でとくに多く所領をヒューから保有しているのは、前述した4名である²⁷⁾。ここでは、ヒューが所領をどのように配分したのか、ルイスの研究に依拠しながらたどってみよう。前述のロバート・オヴ・リズラン、ロバート・フィッツヒュー・オヴ・マルパス、ウィリアム・マルバンク、そして、ウィリアム・フィッツナイジェル・オヴ・ホルトンらは²⁸⁾、ヒューからチェシャーとそれ以外の地域の所領も保有している。チェシャー内の所領は、チェシャー外の所領より必ずしも価値が高いわけではないが、チェシャーに所領を保有する、ということがチェスター伯の中心的封臣たちであったことを窺わせる。チェシャーには伯の拠点である都市チェスターがあり、チェスター伯の重要な役割である対ウェールズ政策の中心である。この地域に拠点を持つことは、実際にチェスターからウェールズ遠征に出発し、またヒューのチェスターでの宮廷集会に参加するのに便利だっただろう。そして、王の直属封臣で、ロバート以外にチェシャー内の所領を保有している者はいない。

ところで、チェスター伯ヒューが、ドゥームズデー・ブックに広大な所領保有の記録を残し、また年代記史料や王の証書にしばしば姿を見せているのに対し、この上記4名のうち、ウィリアム征服王証書に名前があがっていることが確認できる例は非常に少なく、確実なのはロバート・オヴ・リズランのみである²⁹⁾。王証書への登場は王との直接の関係を窺わせ、そのことはヒューに対してロバートがある程度の自立性を持っていたことを感じさせる。この点については後述しよう。一方、残りの3人が王証書にほとんど登場していないことは、彼らが王と直接かかわりをもたない、ヒューのみの封臣だった点を示しているよう。

さて、J・グリーンは、アングロ・ノルマン期イングランド貴族を対象とした研究において、ヒューの封臣たちについては、ヒューが活躍するにつれ、その名声にひかれて彼のもとに集ってきたのではないかと述べた。まず、ヒューの家系であるゴツ家が副伯の地位を受け継いでいるアヴランサン出身と思われる家臣が少ないことが注目される³⁰⁾。その少数のアヴランサンあるいはその近郊出身の人々とは、リシャル・ド・ルロ（ルロ出身）、ニジェル・ド・ブルシ（ブルシ出身）、アモン・ド・マセはアヴランシュそばのマセの可能性が高く、リシャルとウォルタ・ド・ヴァルノン（ヴァルノン出身）と考えられる³¹⁾。この点は、大陸出身の貴族たちが、大陸の自分たちの所領の封臣たちを率いてイングランドにやってきた、という一般的なイメージは間違いではないことを示しつつ、それだけではない出自の多様性を示している。

ヒューのイングランド所領を保有する4人のうち、筆頭にあがるのはロバート・オヴ・リズランである³²⁾。彼はヒューの封臣たちの中でもっとも多くの所領を保有している³³⁾。オルデリクによれば、ロバート・オヴ・リズランは、ヒューの従兄弟であり、ノルマンディの西部出身であった³⁴⁾。オルデリクは、ロバートのことを、「強く、俊敏な騎士であり、雄弁であると同時に恐ろしくもあり、気前がよく、そして多くのすぐれた点によって称賛されるべき人物であった」と描写した³⁵⁾。

ここで、ロバートについて最も有力な情報源であるオルデリクが、ロバート、そしてヒューの宮廷についての情報を得ることができたという事実の背景を確認しておこう。

ロバートとサンテヴルール修道院

オルデリク・ヴィタリスは、チェスター伯ヒューや彼の宮廷に関わる情報を断片的ながらも複数個所にわたり活写した。その中に、ヒューの近しい家臣の1人であるロバート・オヴ・リズランに関する貴重な内容も含まれる。この点については、オルデリク・ヴィタリスの修道院であるサンテヴルール修道院とロバートとの近しい関係が背景にあるだろう。

サンテヴルール修道院は1050年頃、ノルマンディの有力貴族ユーグ・ド・グランムニルとその兄弟ロベール、彼らのおじ、ギョーム・フィッツ・ジロワが古い修道院をもとに再建することによって設立された。なお、このロベールは後にサンテヴルール修道

院の院長となっている。

さて、ロバート・オヴ・リズランの父はオンフロワ・ド・ティエルであるが、母アデリナが、サンテヴルール修道院の再建者である上述のユーグ・ド・グランムニルの姉妹であった³⁶⁾。ロバート・オヴ・リズランの母アデリナとその兄弟ユーグとロベールの父はロベール・ド・グランムニルであり、母はジロワ家のアヴィーザであった³⁷⁾。アデリナの兄弟ユーグ・ド・グランムニル（つまりロバートのおじにあたる）は、ノルマン征服で活躍し、イングランドに広大な所領を得ており、チェスター伯ヒューからレスターシャーの所領を保有している³⁸⁾。さらに、ロバート・オヴ・リズランの兄弟アーノルドとロジャーがサンテヴルールの修道士となっており³⁹⁾、ロバートの両親や親族もまたここに眠っている、とオルデリクが書いていることから、ロバートはサンテヴルールを菩提修道院として意識していたと考えられる。ロバートの活躍がオルデリクの『教会史』を通じてよく伝来しているのはこのようなつながりによって、サンテヴルールとはるかロバートのいたチェシャーとの交流が維持されていたからであろう。実際、サンテヴルールの修道士となったアーノルドは、ウェールズ遠征で没したロバート・オヴ・リズランの遺体が、当初チェスターのセント・ワーバラ修道院に埋葬されていたのを、サンテヴルールに移葬するためチェスターを訪れている⁴⁰⁾。

オルデリクによれば、ヒューの宮廷の騎士たちだったジョフロワ・ド・ヌフマルシェの息子ドロゴ、ロバート・オヴ・リズランの兄弟アーノルド、ロジャー・オヴ・クロンスあるいはウォレンヌらがサンテヴルール修道院に入った⁴¹⁾。アングロ・ノルマン期の有力貴族であったウィリアム・オヴ・ウォレンヌ 1 世の姉妹がエルネイス・オヴ・クロンスと結婚しており、ロジャーは彼らの息子であるため、ウィリアム・オヴ・ウォレンヌの甥ということになる。オルデリクはこのロジャーからウォレンヌ家についての情報を得ていたのだろう。

オルデリクがヒューの宮廷からサンテヴルールの修道士になったと名をあげた人々のうち、ジョフロワ・ド・ヌフマルシェの息子ドロゴの出自は定かではないが、手がかりがないわけではない。ドームズデー・ブックでは、ユーグ・ド・グランムニルの封臣として、オズバーン・ド・ヌフマルシェの名があがっている⁴²⁾。オズバーンとドロゴの直接の関わりは明らかではないが、ドロゴと親族、すくなくとも出身地を同じくする者同士という関連があった可能性が高い。ノルマンディ辺境、フランス王との紛争地域であるヴェクサン地方にあるヌフマルシェには、ユーグ・ド・グランムニルが城を保有しており、またサンテヴルール修道院に従属する小修道院が存在していた⁴³⁾。

また前述のロジャー・オヴ・クロンスの名に見られるクロンスは、ノルマンディ中西部カルヴァドスの地名であり⁴⁴⁾、カルヴァドス西部はヒューの家系であるゴツ家所領の拠点の一つであることから、大陸におけるゴツ家とのつながりが感じられる。さらに、このロジャーのおじであるウィリアム・オヴ・ウォレンヌ 1 世の妻は、ヒューの前に

チェスター伯だったジェルボッドの姉妹のグンドラーダであった⁴⁵⁾。そして、オルデリクによれば、ロジャー・オヴ・ウォレンヌとともにサンテヴルール⁴⁶⁾の院長メネルがイングラント⁴⁷⁾に行き、寄進を募ったとある。それに対し、シュルーズベリ伯ロジャーも、そしてチェスター伯ヒューも寄進を行っている⁴⁸⁾。サンテヴルール⁴⁹⁾の院長メネルが、オルデリクが「生まれのよい修道士」と描写したロジャーをとまっていたことは、有力貴族であるチェスター伯やシュルーズベリ伯の心証をよくしたということなのだろうか⁵⁰⁾。

このように、ヒューの宮廷からそろってサンテヴルール修道院に入った者たち同士のつながりは、同じ宮廷に奉仕していたという以上のものが窺われる。すなわち、ロバート・オヴ・リズランとヒューの家系との関係、そことつながるサンテヴルール修道院との関係、加えてロジャー・オヴ・クロンスからその親族ウォレンヌ家にみられる、イングラントのヒューの拠点チェスターを介したつながりである。そして、チェスター伯ヒューが自身の庶子である息子ロバートをサンテヴルール修道院に入れていることからわかるように、ヒュー自身とサンテヴルール修道院との直接のつながりも強かった⁵¹⁾。

また、ロバート・オヴ・リズランは、ノルマン征服以前、すでにエドワード証聖王の宮廷に関わっていたことにも注目したい。オルデリクによれば、ロバートはエドワード証聖王によって騎士叙任され、奉仕していたとある⁵²⁾。彼はエドワード王の宮廷で騎士としての修業をつみ、立身出世の道をさぐっていたのだろうか。ロバートは、幼いころに父オンフロワとともにイングランドにわたり、エドワード王の宮廷に送られた。そして、騎士叙任された後、故郷にいったんは戻り、そしてヒューとともにイングランドを再度訪れた、とオルデリクは述べている。オルデリクは別の個所で、ユーク・ド・グラナムニルがノルマン征服後、イングランドからノルマンディに一旦帰ったと書いているが、その際、義理の兄弟であるオンフロワも帰ったことを述べた⁵³⁾。騎士となったロバート・オヴ・リズランのノルマンディへの帰還も父たちと一緒にだった可能性は高い。そして、長期にわたりノルマンディ公の宮廷で過ごしたエドワード証聖王が、イングランド王となってからもノルマンディとのつながりを強く維持していたことが指摘されている。この中に、ノルマン征服前にエドワードの宮廷に奉仕していた父オンフロワとロバート・オヴ・リズランを含むことができるだろう。

興味深いことに、オルデリクは、多くの苦労の後に、ヒューがチェスター伯となった際、ロバートはヒューの軍を指揮し、またチェシャー全体の指揮官となったと述べている⁵⁴⁾。そして、D・クラウチはロバートはチェスター伯の伯領支配で最も主要な職であるコンスタブルだったとしている⁵⁵⁾。ロバートがヒューのもとで重要な役割をはたしていたことがわかる。

また、ロバートは征服王の命で1070年代末にリズランに築城し⁵⁶⁾、その後、デガン

ウィーにも築城した。1081年に北部ウェールズの反乱が鎮圧されると、ロバートは独自に王によって北ウェールズを任され、スノードニアやアングルシーにさらに築城する。北ウェールズの所領を王から得たのは、この段階だった可能性がある。彼はヒューの死の7-8年前、すなわち1093年（あるいは94年）に北部ウェールズとの戦闘で命を落とした。当初チェスターのセント・ワーバラ修道院に埋葬され、前述のように、その後サンテヴルールに移葬されることとなった。

ロバートはヒューのもとで多くの所領を保有していた。彼の所領は、チェシャー内のおとくにウェールズとの境界地域に集中している。そして、ウェールズのリズラン・マナーでは、ヒューより多くの所領を持っていた。また、バッキンガムシャー、ノーサンプトンシャー、グロスターシャー、レスターシャーでもヒューのもとで土地を保有していた⁵⁴⁾。

M・ハガーは、チェスター伯ヒューとサンテヴルール修道院の建立者家系のグランムニル家とのつながりについて、以下のように考察している。すなわち、オルデリクは、ロバートの父オンフロワの父は「デーン人のアンスフリッド」であるとし、また別の個所でチェスター伯ヒューの祖父であるトゥルスタン・ゴツが「デーン人アンスフリッド」の息子としている⁵⁵⁾。また、オルデリクはロバート・オヴ・リズランがヒューの従兄弟である、とも述べる⁵⁶⁾。このことから、ロバート・オヴ・リズランとヒューが親族関係にあったことがわかる⁵⁷⁾。ロバートがヒューとともに征服後イングランドに渡ったというオルデリクの描写からは、エドワード証聖王の宮廷を知り、イングランドの状況を知っていたロバートはヒューのガイドとしての役割も果たしたことが想像される。ロバートが、ヒューの主要な封臣であり、家系的にも近く、チェシャーの支配やウェールズ政策でもヒューの側近として活躍していたことが感じられる。

さて、オルデリクによれば、ロバートはサンテヴルールを尊重し、積極的に寄進した。彼の寄進証書そのものの存在は確認できないが、オルデリクが『教会史』に詳細を述べている。これは、ウィリアム征服王が、自分もサンテヴルール修道院に寄進するとともに、彼の封臣たちの寄進を承認したものである⁵⁸⁾。

ロバートに関連して、この寄進証書のいくつかの点に注目したい。そこでは、チェスター伯ヒューが息子ロバートをサンテヴルールに修道士となるよう預け、そして寄進したことが書かれ、続いてロバートがその主人ヒューの了承を得て寄進したと述べられている⁵⁹⁾。ユーグ・ド・グランムニルの寄進も述べられ、証書の最後の証人リストとして、ユーグ・ド・グランムニルと「その親族であるロバート」としてロバート・オヴ・リズランの名が挙がっているのである⁶⁰⁾。

また、オルデリクは『教会史』の別の個所でも同じくロバートの寄進について、今度はその内容を紹介するのみだが、記述している。そこでは、場所が確認できるだけでも、ティレールの教会、ダンプランヴィルの教会に彼が保有する権利と聖職者、ル・

トゥルヌールの教会に彼が保有する権利と聖職者とその水車の十分の一税等を寄進している⁶¹⁾。加えて、パイフィールドの所領と教会、ヒルブル島の教会、カービーのマナ、チェスターにおける教会等と続く⁶²⁾。彼は、この寄進のためにサンテヴルール修道院を訪れ、院長メネルと修道士たちの前で寄進を承認した⁶³⁾。ロバートははるかノルマンディのサンテヴルール修道院に、自分の拠点であるチェシャーのとくにウェールズ境界地域の彼の所領を寄進している。ここに、サンテヴルール修道院とのつながりを維持する意図が感じられる。

なお、オルデリクはここでロバートの寄進について脱線したことを読者に謝っている。『教会史』編者のM・チブナルは、オルデリクが他の場所でもサンテヴルール⁶⁴⁾の寄進について書いたことを読者に向けて謝っている例を指摘している。有力修道院サンテヴルールは多くの寄進を集めたはずだが、オルデリクは建立者家系につながるロバート・オヴ・リズランによるイングランド所領のサンテヴルールへの寄進を記録する必要を特に感じたのではないだろうか。

また、オルデリクはロバートの死に際し、追悼詩文を書きその生涯を韻文でうたった⁶⁵⁾。オルデリクは、ロバートの追悼詩文はロバートの兄弟アーノルドの懇願によって作成した、と書いており、大陸ノルマンディのサンテヴルール修道院に入った修道士アーノルドと、世俗の騎士としての人生を全うしたロバートのつながりが保たれていたことがここでも感じられる。

ロバート・オヴ・リズランの自立性

ところで、ロバートとヒューとの関係を考えるうえで、北ウェールズは特に重要な要素である。北ウェールズはチェシャーに接し、チェスター伯の対ウェールズ政策の直接の対象であり、ヒューとロバートはしばしばウェールズ遠征に出かけている⁶⁶⁾。そして、ドゥームズデー・ブックにおいて、彼がウィリアム征服王から保有しているのは北ウェールズの所領である⁶⁷⁾。この地では、ロバートは自身が王の直属封臣でもあった。そして、ヒューの4人の有力封臣たちで、ロバート以外に王から直接保有しているものはいないのである。一方、ロバートの主君は、王以外はヒューのみであり、この点ではまさにヒューの封臣だった、と言えよう。

ロバートは、ウェールズ遠征に関して自立的な行動をしばしばとった。オルデリクは、征服王がヒューにチェスター伯を任せたと叙述する際、ヒューが、ロバート・オヴ・リズラン、そしてロバート・マルパスら勇猛な騎士たちとともに、ウェールズ人たちを殺戮した、と述べている⁶⁸⁾。オルデリクはわざわざロバートの名前を挙げており、対ウェールズ政策におけるロバートの存在感が窺われる。

一方、オルデリクが特別にロバートに関する情報をよく残している、という事情が影響し、『教会史』においてロバートの行動が目立っている、という可能性がないわけではない。だが、ウェールズ側の資料である『グリフィズ・アブ・カナン⁶⁹⁾の伝記』でもロ

バートの名が特に挙げられているところから、ロバートが対ウェールズ政策に積極的に関わっていたことは間違いないだろう⁶⁹⁾。ロバートはヒューと一緒に北部ウェールズの遠征に出かけ、リズランの地に築城する。

『グリフィズ・アブ・カナンの伝記』では、グリフィズが、トラハン・アブ・カラドグとボウイス王カンリッヒ・アブ・リワロンがグヴィネズを不当にも支配していることに対し、それを奪い返すためリズランの城に向かい、有力貴族のロバートとチェスター伯ヒューに支援を依頼した、と書かれている⁷⁰⁾。結局グリフィズはロバート・オヴ・リズランらの軍の支援を得て、トラハンに勝利した。だが、その後ロバートやヒューの側に対し、軍を差し向けている⁷¹⁾。そして、ドゥームズデー・ブックには、ロバートが実際に北ウェールズに40ポンドと評価される所領を保有している⁷²⁾。

また、ウェールズ遠征以外にも、ロバートの自立性を示す情報がある。オルデリク・ヴィタリスによると、ロバート・オヴ・リズランは、ウィリアム2世に対し、ノルマンディ公ロベールを支持してのバイユー司教オドラがおこした1088年の反乱の際、チェスター伯ヒューがウィリアム2世を支持したのに対し、反乱側を支持していたとされる⁷³⁾。この点からも、ロバートがヒューの家臣でありながらも自立性をもっていたことがわかる。このことについてオルデリクは、シュルーズベリ伯ロジャーがオド側を支持しており、ヒュー・オヴ・グランムニルとその甥ロバートも同様だった、と書いている⁷⁴⁾。これは、ロバートが、モンゴメリ家を支持したグランムニル家に従ったからであろうか⁷⁵⁾。結局、反乱は鎮圧され、オドラ中心人物はイングランドの所領を没収されノルマンディに戻った。だが、ロバートに関しては、その後もヒューとともにウェールズ遠征での活躍が知られていることから、厳しい処分は受けなかったと考えられる。息子ウィリアムがイングランドの所領を継承していたと考えられるため、所領を没収されることはなかったのだろう。

ロバート・オヴ・リズランの息子ウィリアムは、ヘンリ1世の息子であり後継者であるウィリアム王子と同じく、1120年、ノルマンディからイングランドへと英仏海峡を渡る際のホワイト・シップの遭難事故で没した⁷⁶⁾。この事故では、チェスター伯ヒューの息子リチャードや、その兄弟で、ウィリアム王子の教育係だったオトゥールら、多くの貴族家系の子孫たちの命が失われている。ウィリアム・オヴ・リズランの名がここに挙がっていることは、ロバート、そしてその子ウィリアムがヘンリ1世の宮廷と十分近い関係にあったことを示唆しているだろう。なお、ウィリアム・オヴ・リズランがイングランドに渡ろうとしたのは、父の遺産を受け取るためだったとされている⁷⁷⁾。

チェスター伯ヒューとロバート・オヴ・リズラン

上記のことから、ロバート・オヴ・リズランとヒューとの関係においては、いくつかの特徴を指摘することができるだろう。

まず、ロバートとヒューは親族関係にあった。ロバートは、自分の親族が建立したサ

ンテヴルール修道院への帰属意識を持ち続け、イングランドの、とくに自分の拠点と考えられるウェールズ境界地域の所領を寄進し、死後はサンテヴルール修道院に埋葬された。このつながりは、ロバートと親族関係にあるヒュー側においても同様であり、ヒューも自身の庶子をサンテヴルール修道院に入れ、そして寄進している。ただし、ヒュー自身は、チェスターにセント・ワーバラ修道院を建立し、そこに埋葬された。これはロバートの死後である。

そして、ロバートは征服前のイングランドとつながりがあった。ノルマン征服後、ヒューはロバートとともに渡英している。オルデリクの叙述からは、ヒューが戦功をあげてチェスター伯となる前からすでにロバートはヒューと行動をともにしていたことが感じられる。そして、チェスター伯となったヒューのもとで、ロバートはチェシャーの指揮官と言えるような要職についた⁷⁸⁾。また、ロバートが支配していたリズラン・マナーにおいてはヒューより多くを保有し、そして下封せずに直轄地として支配していた。イングランド各地に所領を保有して移動していたヒューに対し、ロバートの支配がチェシャーとウェールズ境界地域に集中していたことが感じられる。したがって、ロバート・オヴ・リズランは所領を保有するという意味でヒューの封臣であったが、経歴や軍事的側面では、主人と封臣という語から想像される上下関係だけではとらえられない関係だったと言えよう。ヒューにとっても、ロバートは頼もしい年長者の立場にあったのではないだろうか。

このロバート・オヴ・リズランに続き、ヒューの他の有力封臣たちをたどっていこう。

3. その他の有力封臣たち

ロバート・フィッツヒュー

オルデリクは、ウェールズ遠征について述べる際、ロバートの次にロバート・フィッツヒューの名をあげている⁷⁹⁾。だが、オルデリクがロバート・フィッツヒューについて記述したのはこの部分のみであり、具体的な出自や経歴の情報はなく、チェスター伯ヒューの庶子だった可能性が指摘されている以外は⁸⁰⁾、ロバート・フィッツヒューの背景は残念ながら不明である。彼の所領は、チェシャー内においては南西部に集中していた⁸¹⁾。この点で、オルデリクの記述から考えても、彼はロバート・オヴ・リズランと並んで対ウェールズ政策の中心を担っていた可能性がある⁸²⁾。

ウィリアム・マルバンク

さて、ヒューの有力封臣の次の1人として、ウィリアム・マルバンクをとりあげよう⁸³⁾。彼が注目されるのは、ヒューだけでなく、シュルーズベリ伯ロジャーの封臣でもあった点である⁸⁴⁾。彼はシュルーズベリ伯ロジャーの家臣でカン近郊出身のアルフレッド・マルブドンの親族と考えられ、大陸でシュルーズベリ伯ロジャーの封臣だった可能

性が指摘されている⁸⁵⁾。

このウィリアム・マルバンクは、シュルーズベリ伯ロジャーからシュロップシャーの所領を保有している⁸⁶⁾。そして、シュルーズベリ伯ロジャーの建立したシュルーズベリ修道院に寄進している⁸⁷⁾。ウェールズ境界地域の主要都市チェスターとシュルーズベリにそれぞれ建つチェスターのセント・ワーバラ修道院とシュルーズベリ修道院は、互いに便宜を図るなど協力関係にあったことが知られており⁸⁸⁾、チェスター伯ヒュー自身もシュルーズベリ修道院に寄進するなど、近しい関係があった。

ウィリアム・フィッツナイジェル

ヒューの中心的封臣として、最後にとりあげるのはウィリアム・フィッツナイジェルである⁸⁹⁾。ロバート・オヴ・リズランの死後、おそらくヒューのコンスタブルとなったと考えられる⁹⁰⁾。K. S. B. キーツ・ローハンはこのウィリアム・フィッツナイジェルをウィリアム・フィッツナイジェル・ド・ライユと同一人物であると考えており、するとノルマンディ西部のマンシュ地方のド・ライユ・ル・ピュイ出身であろう⁹¹⁾。

このウィリアム・フィッツナイジェルは、ロバート・オヴ・リズランとまた異なった形で大陸とつながりを持っている。それは、フランドルとの関係である。すなわち、フランドル出身であり、征服王の直属封臣であるジルベール・ド・ヘントの娘アニエスが、このウィリアム・フィッツナイジェルの妻と考えられている⁹²⁾。ジルベールの家系はフランドルからイングランドに定着し、繁栄した有力家系であった⁹³⁾。

ウィリアム・フィッツナイジェルは、チェスターのコンスタブルであり、おそらくヒューの前にチェスター伯であったジェルボッドとの関連があったのだろう⁹⁴⁾。ウィリアムはヒューがチェスター伯となる以前、ジェルボッドの時代にすでにチェシャーに領主としてやってきていた可能性がある⁹⁵⁾。

このフランドルと関連したつながりは、その後も維持されたようである。ウィリアム・フィッツナイジェルは、1115年にアウグスティヌス派修道院を建立している。もとは自分の拠点であるチェスターの居城ホルトンのそばランコーンに建立したのだが、その際、いどこであるウォルタ・ド・ヘントがヘンリ1世の時代にヨークシャーに建立したブリドリントン・プライオリから修道士を呼んでいるのだった⁹⁶⁾。

このように、ウィリアム・フィッツナイジェルとロバート・オヴ・リズランは、ヒューの封臣であるという関係以外にも、互いにつながりをもっていた。つまり、それぞれがもっていたフランドルやウォレンヌ家とのつながりを介しての関係である。ヒューがチェスター伯となる以前から、彼らがすでにフランドル出身のジェルボッドのもとでチェシャー内に所領を保有していた可能性も十分考えられよう。このことから、ドゥームズデー・ブックに見られるヒューの封臣たちは、ヒューが大陸から連れてきた人々だけでなく、すでにチェシャーに所領を保有していた人々が、新たにヒューの封臣になった可能性をしめしているのである。

たとえば、前述のウィリアム・ド・ウォレンヌの封臣たちについて、ルイスは、いくらかはウォレンヌ家のノルマンディ所領に関係のあるものたちであったと考えているが、多くは関係があったと言える証拠がない、としている⁹⁷⁾。そしてそれは、彼らがすでにイングランドに根付いていた可能性を示すだろう。この点は、チェスター伯ヒューの封臣たちの場合にもあてはまるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、チェスター伯ヒューのもとで所領を保有する封臣たちの中で、ドゥームズデー・ブックに加え、オルデリクが比較的多く手がかりを与えてくれるロバート・オヴ・リズランを中心にイングランド所領の保有の多い4名をたどった。

まず、ドゥームズデー・ブックをもとにしたルイスの研究を土台にしたうえで、彼らの出自や親族関係を確認した。その経歴については、ロバート・オヴ・リズランを例外とすれば、王証書や年代記に現れることはほとんどなく、得られた情報は非常に断片的であった。ドゥームズデー・ブックに見られるヒューの封臣たちは、まさに、「ヒューの封臣」だったのであろう。

さて、ヒューとその封臣たちの出自については、これまで以下のように考えられてきた。すなわち、ノルマン征服は、征服王の側近たち有力貴族中心になされ、彼らが親族や従者たちを集めて、征服という大事業を行う。それには、その有力貴族らが保有する大陸所領に関係のある人々が多く参加していた⁹⁸⁾。ヒューはノルマンディの有力貴族家系とはいえ、最高クラスの家系出身ではなく、ノルマン征服の段階ではまだ若く、おそらく長男でもなかったと思われる⁹⁹⁾。したがって、ヒューはノルマン征服後のイングランドで所領を得ようと考え、その際、やはり、渡英して身をたてようと考えた若者たちを大陸から従えていった、あるいは彼のもとにそのような若者たちが集っただろう。つまり、ヒューの封臣たちはヒュー自身のように、土地を得ようとしている領主家系の二・三男らではなかったか¹⁰⁰⁾。しかし、ドゥームズデー・ブックにみられるヒューの封臣たちからは、ヒューのもとに集まって征服に参加した、あるいはヒューの活躍に惹かれてヒューのもとに集まってきた若者たち、という以上に多様なネットワークの存在が感じられる。

たしかに、ヒューの家系が副伯を担っていたアヴランサン付近の出身と思われる人々はいるが、彼らはドゥームズデー・ブックに現れる封臣の中の一部である¹⁰¹⁾。この点は、おそらくヒューと同様、父親が大陸所領を支配し続け、またその死後は兄弟が大陸所領を継承したウォレンヌ家のウィリアムについても言えることであろう¹⁰²⁾。

ヒューの4人の中心的封臣たちにおいて注目されるのは、チェスター伯家とその封臣たちとフランドルとのネットワークである。ヒューの前にチェシャーを支配していたフランドル出身のジェルボッドの姉妹グンドラードが、征服後イングランドの有力貴族で

あるウォレンヌ家のウィリアムと結婚し、その息子ロジャーがチェスター伯ヒューの宮廷に出ていたこと、そして彼がチェスター伯ヒューの宮廷の仲間たちとともに、サンテヴルール修道院の修道士となっていたことなど、チェシャーの支配者という点だけではない、ジェルボッドとヒューの間のつながりが明らかとなった。また、ジェルボッドの兄弟フレデリックは、ノルマン征服以前からイングランドに所領をもち土台を築き、征服後もその支配を維持していたのである¹⁰³⁾。

そして、ヒューの親族であり、ノルマン征服以前からイングランドにつながるのあるロバート・オヴ・リズランは、オルデリクによれば、ノルマン征服後、ヒューとともにイングランドに再度渡り、ともに苦労した仲である。ロバートはたしかにヒューの封臣だが、単なる封臣以上の関係を感じさせる。ノルマン征服以前、彼がエドワード証聖王に騎士叙任されたということは、イングランド宮廷（また、エドワード証聖王とのノルマンディのつながりを考えれば、ノルマンディ色の強いエドワードの宮廷）で相応の存在感があったはずである。このような、ヒューがイングランドに渡る前からのロバートとイングランドとのつながりを背景に、ロバートは立場上ヒューの封臣とはいえ、ほぼ対等、あるいはイングランドの知識やネットワークの面では、ロバートがヒューを導いたという可能性もあるだろう。この点ではヒューに対しての優位もあろう。これらの条件は、北ウェールズに王から所領を得て王の直属封臣としての立場をもつといった、ロバートの自立性の背景となっていたと考えられる。

さらに、ウィリアム・フィッツナイジェル の例も、ロバートとはまた異なったかたちでフランドルとのつながりを示している。彼は、ヒューがチェスター伯になる以前にチェシャーにすでに所領を持ち、フランドル出身のジェルボッドの代からすでにイングランドに根をおろしていた。したがって、ウィリアム・フィッツナイジェルは、大陸からヒューに従い渡ってきたというより、ヒューがチェスター伯になる際、ジェルボッドから引き継いだ封臣だった可能性が高いのである。また、他の有力貴族家系とつながりのある者として、ウィリアム・マルバンクがいる。彼は、おそらく、ヒューがチェスター伯となる前からシュルーズベリ伯ロジャーとのつながりをもっており、ウェールズ境界のこの地域に基盤を築いていたのではないだろうか。実際、ヒューもシュルーズベリ伯ロジャーから所領を保有している。そして、4人の有力封臣の1人であるロバート・フィッツヒューがヒューの庶子であったならば、ヒューが息子に所領を与え、その自立の手助けをした、と考えられる。

これらの情報からわかるのは、チェスター伯となったヒューが、あらたに大陸から渡ってきた貴族たちを率いてそれまでのチェシャーの所領を保有していた封臣たちを刷新したのではない、ということである。それよりも、すでに存在していたネットワークの中にヒューが加わることで、彼を含む新たなネットワークを現地で構築していったのではないだろうか。ヒューが他の直属封臣から所領を保有していないことや、チェ

シャーに司教をのぞいてヒュー以外の直属封臣がいないことなどは、チェシャーの独自性としてあげられてきた。だが、チェシャーもやはり、他の地域やすでに存在していたネットワークに組み込まれていた存在であることは意識しなければならない。

ここでもう1点指摘しておきたい。ヒューは、オルデリク・ヴィタリスのおかげもあって年代記資料に相対的によく現れる。そして、ヒューがウィリアム征服王との関係において存在感を示すのは、征服王の証書に登場するからである。ハガーはユーク・ド・グランムニルのネットワークを研究した論考において、貴族間ネットワークが流動性を持ち、時期や状況により変化したことを明らかにしている。この点は、ドゥームズデー・ブックという、ある時期を区切った資料に依拠してヒューの家臣団を検討する際、留意しておかなければならない点であろう。すなわち、ドゥームズデー・ブックにおける、他に類を見ない詳細な情報は、ある時期におけるイングランドの所領保有を土台とする人的結合を明らかにしてくれるが、そこからは浮かび上がってこない、あるいは時代によって変化する流動的なネットワークの重要性を覆い隠してしまう可能性である。本稿は、ドゥームズデー・ブックを利用しつつ、ヒューの封臣たちの、そこには浮かび上がらないネットワークをさぐる試みであった。

本稿では、ヒューの数少ない主要封臣たちについての断片的な情報を、ルイスの研究を中心に整理補足したのみであり、今後は、チェスター伯以外のアングロ・ノルマン貴族による封臣たちのネットワークを考察しつつ、多様な事例をより丁寧に明らかにしていく作業が必要となろう。

(本研究は JSPS 科研費 JP20K01046 の助成を受けたものです。)

注

- 1) ヒューの出身家系であるゴツ家については、L. Musset, 'Actes inédits du XI^e siècle. I. Les plus anciennes chartes du prieuré de Saint-Gabriel (Calvados)', *Bulletin de la société des antiquaires de Normandie*, 52 (1952-54), pp. 116-41. L. Musset, 'Les origines et le patrimoine de l'abbaye de Saint-Sever' dans J. Daoust ed., *La Normandie bénédictine au temps de Guillaume le conquérant* (1969), pp. 357-67. 拙稿「11世紀前半のノルマンディー公と副伯ゴツ家」『西洋史学』190号、1998年、21 (107)-39 (125) 頁。拙稿「11世紀前半のノルマンディー公と地方貴族——西部を中心に」朝治啓三、渡辺節夫、加藤玄編著『〈帝国〉で読み解く中世ヨーロッパ——英独仏関係史から考える』ミネルヴァ書房、2017年、34-56頁。ヒューの経歴については、C. P. Lewis, 'd'Avranches, Hugh, first earl of Chester (d. 1101)' (ONDB, 2004). 拙稿「チェスター伯ヒューとアングロ・ノルマン王国」『史林』82巻6号、1999年、37 (883)-65 (911) 頁。拙稿「北部ウェールズとチェスター伯ヒュー」『愛知学院大学文学部紀要』48号、2019年、7-18頁。また、「アングロ・ノルマン」という用語については、バーバラ・ハーヴェー編、鶴島博和日本語版監修、吉武憲司監訳『オックスフォードブリテン諸島の歴史 4 12・13世紀1066年-1280年頃』慶應義塾大学出版会、2012年、原著2001年、第1章 訳注〔2〕342-3頁。拙稿『ノルマン帝国』後の40年——貴族層と中心としたアングロ・ノルマン史研究の

- 現在の動向」愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』第30号、2015年、294 (1)–78 (17) 頁、4–8 頁。
- 2) M. Chibnall ed., *The Ecclesiastical History of Orderic Vitalis*, 6 vols. (Oxford, 1969–81) (以下 OV).
オルデリク・ヴィタリスについては、M. Chibnall, *The World of Orderic Vitalis* (Woodbridge, 1991 org. Oxford, 1984).
 - 3) ノルマン征服期、どのような者たちがヒューのような有力貴族に従っていたかについては、『オックスフォードブリテン諸島の歴史 4 12・13世紀 1066年–1280年頃』、43–4 頁。
 - 4) ヒューを取り巻く家臣たちを、ヒューから所領を保有している人々に代表させてここでは封臣たちと呼ぶが、広く様々な人的紐帯で結びついた人々として考えたい。
 - 5) ノルマン征服がイングランドに与えた影響についての研究は膨大な蓄積があり、貴族層に関しても同様である。ここでは J. Green, *Aristocracy of Anglo-Norman England* (Cambridge, 1997), p. 1, Chapter 2 The revolution を挙げておく。最近の研究動向として、J. Green, 'The aristocracy of conquered England', in: D. Bates ed., *1066 in Perspective* (Leeds, 2018), pp. 204–12.
 - 6) Green, *Aristocracy*, Chapter 2 The revolution, Chapter 5 The organization of lordships and the management of resources.
 - 7) C. P. Lewis, 'The Formation of the Honor of Chester 1066–1100', in: A. T. Thacker ed., *The Earldom of Chester and its Charters* (Chester, 1991), pp. 37–68, p. 54. W. Farrer, *Honors and Knights' Fees*, 3 vols (Manchester, 1925) (以下 HKF), vol 2, Chester, pp. 5–6. ドゥームズデー・ブックに Gherbod の名は見られるが (S. Baxter, 'Gherbod1, Gherbod2', *The Prosopography of Anglo-Saxon England*, www.domesday.pase.ac.uk, 2021/5/6 (以下 PASE Domesday)). このジェルボッドはレイシー家の封臣であり、チェスターを支配したジェルボッドとはみなされていない。また、ルイスは、ジェルボッドはチェシャー以外には所領を与えられなかったと考えている (Lewis, 'Formation', p. 39)。
 - 8) 近年の研究として、たとえば、J. Hudson, 'Imposing Feudalism on Anglo-Saxon England: Norman and Angevin Presentation of Pre-Conquest Lordship and Landholding', in: S. Bagge, M. H. Gelting, T. Lindkvist eds., *Feudalism New Landscapes of Debate* (Turnhout, 2011), pp. 115–34.
 - 9) ノルマン征服後の土地保有の変化をたどった研究として、たとえば R. Fleming, *Kings and Lords in Conquest England* (Cambridge, 1991).
 - 10) S. Baxter, 'Hugh 8: Hugh, earl, fl. 1086', *PASE Domesday*, 2021/5/6.
 - 11) ノルマン征服前のチェスターについては、P. H. Sawyer and A. T. Thacker, 'The Cheshire Domesday', in: B. E. Harris, assisted by A. T. Thacker ed., *A History of the County of Chester*, vol. i (Victoria County History), (以下 VCH) Oxford, 1987), pp. 260–3. マーシアについては、S. Baxter, *The Earls of Mercia Lordship and Power in Late Anglo-Saxon England* (Oxford, 2007).
 - 12) ドゥームズデー・ブックによれば、ヒュー以外にはチェスター司教とセント・ワーバラ教会のみが王から保有していた。このセント・ワーバラ教会は、1092年ヒューによりセント・ワーバラ修道院として再建され、ヒューの家系の菩提修道院となる。J. Tait, *The Chartulary or Register of the Abbey of St. Weburgh Chester*, 2 vols (Manchester, 1920, 1923), I, pp. xxii–xxviii. G. Barraclough ed., *The Charters of the Anglo-Norman Earls of Chester, c. 1071–1237* (Chester, 1988) (以下 CEC), p. 8.
 - 13) D. Crouch, 'The Administration of the Norman Earldom', in: A. T. Thacker ed., *The Earldom of Chester and its Charters* (Chester, 1991), pp. 69–96, p. 70. クラウチはレスター伯、ダービー伯の例をあげる。
 - 14) G. Barraclough, 'The Earldom and County Palatine of Chester', *Transactions of the Historic*

- Society of Lancashire and Cheshire*, vol. 103 (1952), pp. 23–57.
- 15) Musset, ‘Les origines et le patrimoine de l’abbaye de Saint-Sever’. 拙稿「11世紀前半のノルマンディー公と副伯ゴツ家」、27 (113) 頁。
- 16) Lewis, ‘Formation’. また、ルイスの未刊行博士論文 C. P. Lewis, ‘English and Norman Government and Lordship in the Welsh Borders, 1039–1087’ (Unpublished D. Phil thesis, Oxford, 1985) は、チェシャーに隣接するウェールズ境界地域の他の2州、すなわちシュロップシャー、ヘリフォードシャーも研究対象としている。そして *VCH, Chester*, i がドゥームズデー・ブックにおけるチェシャーを、アングロ・サクソン期も合わせて紹介している。チェシャー・ドゥームズデーとして利用しやすいのは J. Morris ed., *Cheshire: Domesday Book* (Chichester, 1975–86, 1978)。
- 17) ドゥームズデー・ブックについての研究は近年ますます発展している。ドゥームズデー・ブック全体がデジタル史料化され、オンラインで利用できるようになり、研究の発展に寄与している。ドゥームズデー・ブック全体については、イギリスの国立公文書館である The National Archives の Domesday Book の情報が詳細である。 <https://www.nationalarchives.gov.uk/help-with-your-research/research-guides/domesday-book/> ドゥームズデー・ブックに関連する主要なオンラインデータベースとしては本稿でも中心に使用する The Prosopography of Anglo-Saxon England (PASE) <http://www.pase.ac.uk/> また、The Domesday Survey of SW England <https://www.exondomesday.ac.uk/> ドゥームズデー・ブックのデジタル画像として Open Domesday <https://opendomesday.org/> ドゥームズデー・ブックとその調査に関する情報として、Hull Domesday Project <http://www.domesdaybook.net/home> などがある。また、ドゥームズデー研究の現状を紹介する論考の最近のものとして、D. Roffe, K. S. B. Keats-Rohan eds., *Domesday Now: New Approaches to the Inquest and the Book* (Woodbridge, 2016)。また S. Baxter, ‘The Domesday Controversy: A Review and a New Interpretation’, *Haskins Society Journal*, 29 (2018), pp. 225–93. S. Baxter, ‘How and Why Was Domesday Made?’, *English Historical Review*, 135 (2020), pp. 1085–131 がある。
- 18) S. Baxter, ‘Robert 54: Robert bishop of Chester, fl. 1086’, *PASE Domesday*, 2021/5/7.
- 19) Lewis, ‘Formation’, pp. 43–4.
- 20) Lewis, ‘Formation’, p. 47.
- 21) ヒューのチェシャー所領の下封については、*VCH, Chester*, i, pp. 302–15. チェシャー・ドゥームズデーについては、J. Tait, *The Domesday Survey of Cheshire* (Manchester, 1916), *The Cheshire Domesday*, Alexto Histocirial Edition (London, 1991).
- 22) Lewis, ‘Formation’, p. 57.
- 23) S. Baxter, ‘Robert 28: Robert of Rhuddlan, fl. 1086’, *PASE Domesday*, 2021/5/6.
- 24) S. Baxter, ‘William 77: William Malbank, fl. 1086’, *PASE Domesday*, 2021/5/6. ヒューから以外は、シュルーズベリ伯ロジャー、そして、チェスター司教からわずかに保有している。
- 25) S. Baxter, ‘William 83: William FitzNigel, fl. 1086’, *PASE Domesday*, 2021/5/6. ヒューから以外は、モルタン伯ロベール、ロジェ・ボワトヴァンからも保有している。
- 26) S. Baxter, ‘Robert 74: Robert fitzHugh, fl. 1086’, *PASE Domesday*, 2021/5/6. ヒュー以外はチェスター司教から保有しているのみである。
- 27) Lewis, ‘English and Norman Government’, p. 194. Lewis, ‘Formation’, pp. 59–60. *VCH, Chester*, i, p. 310. ルイスはこれにヒュー・フィッツノルマンも加えることができるかもしれない、と続けている。S. Baxter ‘Hugh 42: Hugh fitz Norman, fl. 1086’, *PASE Domesday*, 2021/5/6. Lewis, ‘Formation’, p. 60.

- 28) Lewis, 'Formation', p. 59. *VCH, Chester*, i, pp. 307–10.
- 29) D. Bates, *Regesta Regum Anglo-Normannorum The Acta of William I (1066–1087)*, (Oxford, 1998), nos. 146, 255. なお、K. S. B. キーツ・ローハンは、Bates, *Regesta*, no. 48 の Willelmi filii Nigelli de Haga をヒューの有力封臣ウィリアム・フィッツナイジェルと考えている。K. S. B. Keats-Rohan, *Domesday People I. Domesday Book* (Woodbridge, 1999), p. 486.
- 30) Green, *Aristocracy*, p. 75. *VCH, Chester*, i, p. 306.
- 31) Green, *Aristocracy*, p. 75. Roullours (Calvados, arr. Vire, canton Vire), Burcy (Calvados, arr. Vire, canton Condé-sur-Noireau), Macey (Manche, arr. Avranches, canton Pontorson), Vernon (Eure, arr. Les Andelys, canton Vernon).
- 32) *VCH, Chester*, i, p. 307. ロバートの生涯については、OV, iv, pp. xxxiv–xxxviii.
- 33) ドゥームズデー・ブックにみられるロバート・オヴ・リズランの所領については、S. Baxter, 'Robert 28: Robert of Rhuddlan', *PASE Domesday*, 2021/5/6.
- 34) OV, iv, pp. 138–9. Tilleul-en-Auge (Le Theil-en-Auge ?) (Calvados, arr. Lisieux, cant. Honfleur-Deauville). L. C. Loyd, *The Origins of Some Anglo-Norman Families* (Originally Leeds, 1951, rep. Baltimore, 1999), p. 85.
- 35) OV, iv, pp. 136–7.
- 36) OV, iv, pp. 136–7. Chibnall, *The World of Orderic Vitalis*, p. 227. サンテヴルール修道院の建立については、E. M. C. Houts, *The Gesta Normannorum Ducum of William of Jumièges, Orderic Vitalis, and Robert of Torigni*, 2 vols (Oxford, 1995) (以下 GND), ii, p. 136. OV, ii, 14–6. Chibnall, *The World of Orderic Vitalis*, pp. 17–23. オルデリクは、ロバートとユグ・ド・グランムニルの墓碑銘を『教会史』に書いている。OV, iv, pp. 143–7, 336–9.
- 37) Keats-Rohan, *Domesday People*, p. 379. M. Hagger, 'Kinship and identity in eleventh-century Normandy: the case of Hugh de Grandmesnil, c. 1040–1098', *Journal of Medieval History*, 32 (2006), pp. 212–230, p. 217, fn. 22. Chibnall, *The World of Orderic Vitalis*, p. 227.
- 38) S. Baxter, 'Hugh 5: Hugh de Grandmesnil, fl. 1086', *PASE Domesday*, 2021/5/8.
- 39) Chibnall, *The World of Orderic Vitalis*, p. 227.
- 40) OV, iv, pp. xxxvi.
- 41) OV, ii, 260–3, iii, 118–21, 216–7, 226–31. Chibnall, *The World of Orderic Vitalis*, p. 15. E. M. C. van Houts and R. C. Love, ed. and tr., *The Warenne(Hyde) Chronicle* (Oxford, 2013), p. xlvii.
- 42) Baxter, 'Hugh de Grandmesnil', *PASE Domesday*, 2021/5/6.
- 43) Chibnall, *The World of Orderic Vitalis*, pp. 18, 23.
- 44) Coulonces (Calvados, arr. Vire, canton Vire).
- 45) C. P. Lewis, 'Warenne, Gundrada de (d. 1085)' (ONDB, 2004). Van Houts and Love, *Warenne Chronicle*, p. liv. E. Oksanen, *Flanders and the Anglo-Norman World 1066–1216* (Cambridge, 2012), p. 181.
- 46) OV, iii, pp. 232–41.
- 47) OV, iii, pp. 118–9.
- 48) OV, iii, pp. 236–9.
- 49) OV, iv, pp. 136–7. M・ハガーは、これは当然ながらエドワードの没する以前で、ノルマン勢力の影響が王の宮廷にはっきりとあらわれはじめる 1052 年より後と考えている。Hagger, 'Kinship and Identity', p. 222, fn. 57.
- 50) OV, ii, pp. 220–1.
- 51) OV, iv, pp. 138–9, fn. 2. : Deinde post multos agones predicto Hugoni comitatus Cestrensis datus

- est; et Robertus princeps militiae eius et tocius prouinciae gubernator factus est. チブナルはシェリフと考える。
- 52) Crouch, 'The Administration of the Norman Earldom', pp. 75–6. ただし、役職名をともなって史料に現れることはない。
- 53) OV, iv, pp. 138–9: Decreto itaque regis oppidum contra Gualos apud Rodelentum constructum est; et Robert ut ipse pro defensione Anglici regni barbaris opponeretur datum est. *VCH, Chester*, i, p. 307.
- 54) Baxter, 'Robert of Rhuddlan', *PASE Domesday*, 2021/5/6. *VCH, Chester*, i, p. 308. また、ドゥームズデー・ブックに現れる所領のその後については、*HKF*, ii, pp. 13–5, 51, 211–5, 219–21, 224, 280.
- 55) OV, iv, pp. 136–7: Vnfridus pater eius fuit filius Ansfridi de progenie Dacorum; *GND*, ii, pp. 100–102; Hagger, 'Kinship and identity', p. 222.
- 56) OV, iv, pp. 138–9: prefatus tiro cum Hugone consobrino suo; Hagger, 'Kinship and Identity', p. 222.
- 57) Hagger, 'Kinship and Identity', p. 222.
- 58) OV, iii, pp. 232–41. Bates, *Regesta*, no. 255. オルデリク・ヴィタリスの『教会史』における証書の利用については、T. Roche, 'Reading Orderic with Charters in Mind', in: C. C. Rozier, D. Roach, G. E. M. Gasper and E. van Houts eds., *Orderic Vitalis* (Woodbridge, 2016), pp. 145–71.
- 59) OV, iii, pp. 236–9.
- 60) OV, iii, pp. 238–41: Hugo de Grentemaisnil et nepos eius Rodbertus de Rodelento.
- 61) OV, iv, pp. 136–7. Tilleul: Tilleul-en-Auge (Le Theil-en-Auge ?) (Calvados, arr. Lisieux, canton Honfleur-Deauville). Damblainville (Calvados, arr. Caen, canton Falaise). Le Tourneur (Calvados, arr. Vire canton Condé-sur-Noireau).
- 62) Byfield (Northamptonshire), カービーはチェシャー西部のはウィラル半島の都市であり、ヒルブル島はウィラル半島そばの島である。
- 63) OV, iv, pp. 136–7. *VCH, Chester*, i, p. 308.
- 64) OV, iv, pp. 136–9.
- 65) OV, iv, pp. 144–7.
- 66) ノルマン征服直後の北ウェールズとチェシャーとの関係については、拙稿「北部ウェールズとチェスター伯」。
- 67) Baxter, 'Robert of Rhuddlan', *PASE Domesday*.
- 68) OV, ii, pp. 260–1.
- 69) P. Russel, ed. and tr. *Vita Griffini Filii Conani The Medieval Latin Life of Gruffudd ap Cynan* (Cardiff, 2005) (以下 *Vita*). チェシャーに隣接する北ウェールズの王国グヴィネッツの君主であるグリフィズ・アプ・カナン伝記資料である。
- 70) *Vita*, §10.
- 71) *Vita*, §12, pp. 138–9, §13.
- 72) Cheshire, G1, *PASE Domesday*, 2021/5/8.
- 73) OV, iv, pp. 124–5.
- 74) OV, iv, pp. 124–5.
- 75) Keats-Rohan, *Domesday People*, p. 379. ただし 1093/4 とあるのは 1088.
- 76) OV, vi, pp. 304–7. *VCH, Chester*, i, p. 307. Keats-Rohan, *Domesday People*, p. 379.
- 77) OV, vi, pp. 304–5.

- 78) Crouch, 'The Administration of the Norman Earldom', p. 75.
- 79) OV, ii, 260-1. *VCH, Chester*, i, p. 308. また、チェスター伯ヒューやロバート・オヴ・リズランの名を挙げる『グリフィズ・アプ・カナン伝記』においても、ロバート・フィッツヒューの名は登場しない。
- 80) Green, *Aristocracy*, p. 75, fn. 147. Lewis, 'English and Norman Government', pp. 196-7. ロバート・フィッツヒューのドゥームズデー所領については、Baxter, 'Robert fitzHugh', *PASE Domesday*, 2021/5/6.
- 81) *VCH, Chester*, i, p. 308.
- 82) Lewis, 'English and Norman Government', pp. 205-6.
- 83) Baxter, 'William Malbank', *PASE Domesday*, 2021/5/6.
- 84) Keats-Rohan, *Domesday People*, pp. 492-3.
- 85) Green, *Aristocracy*, p. 75. *VCH, Chester*, i, p. 309. Lewis, 'English and Norman Government' pp. 195-6. なお、シュルーズベリ伯ロジャーが建立したトロンのサンマルタン修道院への寄進の中にリシャール・マルバンクの名が見える。R. N. Sauvage, *L'Abbaye de Saint-Martin de Troarn au diocèse de Bayeux des origines au seizième siècle* (Caen, 1911), no. 4, pp. 358, 381.
- 86) Baxter, 'William Malbank', *PASE Domesday*, 2021/5/6. Shropshire, 4.15.1-4: Gravenhunger, Woore, Dorrington, Onneley.
- 87) ウィリアム・マルバンクとその同名の息子がシュルーズベリ修道院に寄進している。U. Rees, ed., *The Cartulary of Shrewsbury Abbey* (Aberystwyth, 1975), no. 36, pp. 43, 46.
- 88) 拙稿「ステイヴン王期のチェスター伯と北部ウェールズ——境界をまたぐネットワーク形成」高田京比子他編著『ヨーロッパ中近世史のフロンティア』昭和堂、2021年刊行予定。
- 89) ウィリアム・フィッツナイジェルスのドゥームズデー所領については、Baxter, 'William fitzNigel', *PASE Domesday*, 2021/5/6.
- 90) *CEC*, no. 3: Signum Willelmi constabularii; no. 12. バラクラフはここに現れるコンスタブル Teste Willelmo constabulario について、ウィリアム・フィッツナイジェルと考えている。また、*CEC*, no. 3: Willelmi Nigeli filio, Willelmo constabulari, no. 6: Willelmi filii Nigeli, no. 28: Willelmo Nigelli filio, Willelmus constabularii として登場。チェスター伯のコンスタブルについては Crouch, 'The Administration of the Norman Earldom', p. 76. *VCH, Chester*, i, p. 309.
- 91) La-Haye-du-Puits (Manche, arr. Coutances, canton Créances). Keats-Rohan, *Domesday People*, p. 486. また William fitz Nigel de Haie がカンのサンティエンヌ修道院に寄進している（前註 29）。Bates, *Regesta*, no. 48: S(ignum) Willelmi filii Nigelli de Haga. この寄進の一部は、ゴツ家の親族と考えられるロベール・ゴツの寄進をチェスター伯ヒューが承認したものであり、ヒュー自身も全体の証人として登場している。
- 92) Green, *Aristocracy*, p. 75. Ghent 家の大陸の出自については、R. M. Sherman, 'The Continental Origins of the Ghent Family of Lincolnshire', *Nottingham Medieval Studies*, 22 (1978), pp. 23-35.
- 93) Oksanen, *Flanders and the Anglo-Norman World*, pp. 204-5.
- 94) ジェルボッドとその家族について、Lewis, 'Formation', pp. 38-40. Oksanen, *Flanders and the Anglo-Norman World*, pp. 95-102.
- 95) Lewis, 'English and Norman Government', p. 195. *VCH, Chester*, i, pp. 309-10.
- 96) *VCH, Chester*, iii, House of Augustinian Canons 2021/2/18. プリドリントン小修道院については、*VCH, York*, iii, Houses of Austin Canons, 47, The Priory of Bridlington, British History Online, 2021/5/7. そしてウィリアム・フィッツナイジェルはプリドリントン小修道院に寄進している。Green, *Aristocracy*, p. 75.

- 97) C. P. Lewis, 'Warene, William I de, first earl of Surrey (Earl Warene) (d. 1088)'(ODNB, 2004).
- 98) Green, *Aristocracy*, pp. 45–7.
- 99) 拙稿「11世紀前半のノルマンディー公と副伯ゴツ家」、36 (122)–37 (123) 頁。
- 100) *VCH, Chester*, i, p. 306. Lewis, 'English and Norman Government', pp. 188–9.
- 101) Green, *Aristocracy*, p. 75.
- 102) Lewis, 'Warene, William I de, first earl of Surrey (Earl Warene) (d. 1088)'.
- 103) Van Houts and Love, *The Warene Chronicle*, pp. 105–6. Oksanen, *Flanders and the Anglo-Norman World*, p. 181.